

第39回庭野平和賞 受賞記念講演

【仮訳】

「地獄の中で癒しを生み出し続ける」

記憶の癒しグローバルネットワーク会長
マイケル・ラプスレー聖公会司祭（聖使修士会）

2022年6月14日

「生ましめんかな」

こわれたビルディングの地下室の夜だった。
原子爆弾の負傷者たちは
ローソク1本ない暗い地下室を
うずめて、いっぱいだった。
生ぐさい血の匂い、死臭。
汗くさい人いきれ、うめきごえ
その中から不思議な声が聞こえて来た。
「赤ん坊が生まれる」と言うのだ。
この地獄の底のような地下室で
今、若い女が産気づいているのだ。
マッチ1本ないくらがりで
どうしたらしいのだろう
人々は自分の痛みを忘れて気づかなかった。
と、「私が産婆です。私が生ませましょう」
と言ったのは
さっきまでうめいていた重傷者だ。
かくてくらがりの地獄の底で
新しい生命は生まれた。
かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。
生ましめんかな
生ましめんかな
己が命捨つとも
—1945年9月

語られざる原爆の物語

栗原貞子

リチャード・マイニア訳ⁱ

この詩を私に教えてくださった広島の友人、中村朋子元広島国際大学教授に感謝いたします。

戦争の終結を願うとともに、戦争で亡くなったすべての人々のために、そして過去の行為に今も心を苛まれている兵士たちのために、お話しをさせていただきたいと思います。

親愛なる友人の皆さま

はじめに、庭野平和財団の創設者である庭野日敬師に敬意を表したいと存じます。本日の催しは、庭野師の遺志が今も脈々と生き続けていることの証しであり、過去の38人の受賞者の顔ぶれは、平和構築と宗教協力の取り組みが、無数の人々によりあらゆる時と場所で豊かに織りなされてきた歴史を物語っています。

受賞者の一人、偉大なるカトリック神学者ハンス・キュング博士は、次のような言葉を残しています。

「宗教間の平和なくして国家間の平和はない。
宗教間の対話なくして宗教間の平和はない。
宗教の根本を探究することなくして宗教間の対話はない」

本日は第39回庭野平和賞を受賞し、身の引き締まる思いです。この賞は、記憶の癒し研究所とそのグローバルネットワークに関わるすべての人々に等しく授与されるべきものです。私たちの道のりには、多くの仲間がいました。

歴史が負った傷を癒すことは、私たちにとって喫緊の課題であり、「記憶の癒し」はそこに焦点を当てています。過去を認めながら過去に囚われないためにはどうすればよいか。被害者が加害者になる連鎖を断ち切るにはどうしたらよいか。

まさに「記憶の癒し」とは、憎しみ、復讐心、恨みをはじめ、心の中のさまざまな毒素を取り除くためのプロセスなのです。

歴史の語り部を支え、安全な空間を作り、平和の「出産」を助ける「助産師」——それが私の望んでいる「記憶の癒し」ファシリテーターの役割です。

癒されないままのトラウマが、世代を超えて継承されていくことは、多くの人の指摘するところです。それは、個人にも、地域社会にも、国家にも言えることであり、政治的暴力が収まると、家庭内暴力や性的暴力に姿を変えエスカレートしていきます。

庭野平和賞の受賞者発表が行われた同じ週に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。何百万人の人々が家を追われて難民となり、計り知れない苦しみが引き起こされ、第二次世界大戦以降最大の難民危機が発生しました。

当然ながら、今世界はウクライナに注目しています。

アパルトヘイトとの闘いを続いている間、世界中のあらゆる地域の人々が私たち南アフリカ国民を支援してくださいました。思い返せば、大規模な国際的連帯を経験できたことは、私たちにとってたいへん幸運なことでした。

長期にわたる紛争や戦争は、現在も数多くあります。しかし、世界はそうした問題に十分な注意を向けていません。

イエメン、エチオピアのティグレ州、ミャンマーの内戦はその一例に過ぎません。

特にパレスチナ人が抵抗を続けるイスラエルの分離政策については、その倫理的な問題に目をつむっているようです。

1948年、国連は世界人権宣言を採択しました。しかし2022年になった今も明らかなのは、基本的人権は平等ではなく、人々の間でその重さに差があるという事実です。

ロシアのウクライナ侵攻が始まって間もなく、数百万人の人々が国外に避難するなか、ウクライナ国境で多くのアフリカ系住民が人種差別を経験しました。黒人の命が白人の命よりも軽視されたのです。

また、黒人男性を中心に多数の命が警察によって奪われてきた米国では、ジョージ・ Floyd 氏の死をきっかけに、「ブラック・ライブズ・マター」運動が急激な盛り上がりを見せました。

この運動がアフリカの国々は言うまでもなく、世界中に反響を呼び起こしたのは、今まで長年にわたり人種差別に耐えてきた人々の実体験と重なって受け止められたからでした。

奴隸制と植民地支配で黒人が受けた被害に対し、これまで以上に補償を求める声が強まっています。しかし、白人の特権に関する重要な対話は緒に就いたばかりで、いつになれば対話が変革的正義をもたらすのか、今後の結果を待つしかありません。

私たちは「記憶の癒し」の活動を、過去20年にわたり世界中で進めてきましたが、その活動には「ジェンダーに基づく暴力」と「幼少期のトラウマ」という二つの共通テーマがあります。

ジェンダーに基づく暴力は、人類の歴史に残された最古の傷ではないでしょうか。私たちが身を置く宗教界は、社会の主流よりも男性優位の傾向が強いのが現状です。文化、伝統、宗教の名のもとに女性を抑圧しながら、私たち男性は往々にしてその事実をごまかそうとしてきました。

記憶の癒し研究所では、男性の加害者としての側面と、暴力の抑止力としての側面の両方に焦点を当てた「ハンズ・オブ・メン」というメディア・キャンペーンを行っています。「男らしさ」の概念は時に毒を持ち、そのため男性は自分の弱さを認めたり、自分の傷を気にしたりすることができないのです。

宗教界の組織の多くは人間の性に関する問題で躊躇した経験を持ち、この問題に対して最も抑圧的な姿勢を貫いてきました。そのため、性的マイノリティーの人々に深い傷を負わせる結果になりました。性的志向の多様性は遺伝に関する事柄であるというのが、現代の科学的な見地です。

性的志向は選んで決められるものではありません。私の長年の夢は、あらゆる主要宗教の指導者たちがLGBTQIA+の人々に対して、これまで抑圧に加担してきたことを公式に謝罪する姿を見ることです。

今回の受賞の発表では、南アフリカに「キューバ友の会」を設立した私の役割について具体的な言及がありました。キューバは60年以上にわたり、米国による違法かつ非倫理的な封鎖政策のもとにありながら、人々の連帯の意味を世界に、とりわけアジア、アフリカ、ラテンアメリカの最貧困に示しました。キューバにとって「すべての人への良質な医療の提供」はスローガンではなく、現実の姿です。新型コロナウィルスの世界的流行に対し、大量破壊兵器は全く無力であり、闘いのヒーローとなったのは医師や看護師でした。キューバのヘンリー・リーヴス旅団は南アフリカなどの国々で、またイタリアのような裕福な国々でも、数え切れないほど多くの命を救ったのです。

アパルトヘイトとの絶え間のない闘いのなか、その最前線に掲げた目標のひとつが死刑制度の廃止でした。かつてプレトリアでは毎週木曜日の朝、一度に最大7人の死刑が執行され、そのほとんどが黒人や貧しい人々でした。今日、南アフリカでは死刑は廃止されています。私の願いは、世界中のすべての国が命を選択し、死刑を廃止するのを見届けるまで長生きをすることです。そして、庭野平和財団にもこの運動を支援していただけるものと期待しています。

ロシアによるウクライナ侵攻は悲劇です。ウクライナだけでなく、ロシアの人々にとっても悲劇です。ロシア国内の信仰者、とりわけ一般の聖職者が戦争反対を表明している姿を見ると、心強く感じます。長期間の投獄の危険にさらされながらも、ロシア各地の都市には戦争反対と平和を訴え続けている人々がいるのです。

戦争などによるトラウマが、のちに心的外傷後ストレス障害（PTSD）として発症することが心理学者によって明らかにされ、良心に反する行為の結果として生じる心的外傷について、多くのことが語られるようになりました。私たちの宗教伝統の多くは、「人はみな聖なるものを宿しており、他者への攻撃は他者に内在する聖性のみならず、自己の内なる聖性への攻撃となる」ことを説いています。

良心の呵責や心の傷は、飲み薬では治せません。罪を告白し、懺悔し、過ちを償って生きることでしか癒せないのでした。

ロシア兵もウクライナ兵も、今後何十年も良心の呵責や心の傷を抱えて生きていくに違いありません。その傷は、将来の世代にも受け継がれていくことでしょう。

それは、南アフリカ国民にも、日本人にも、そのほかの世界中の人々にとっても同じです。

今日再び、私たちは核戦争の脅威に直面しています。庭野平和財団創設者の庭野師は、かつて核軍縮を訴えスピーチをされました。

軍国主義を経験し、かつ原爆による深い傷をその記憶に留める唯一の被爆国として、日本は核軍縮に向け新たな世界運動を支援すべき特別な立場にあります。

また、こうした運動は日本政府と同じく、庭野平和財団にも支援していただけるものと思います。

気候変動の危機は、母なる大地に宣戦布告をした私たち人類に向け、大地が発している苦痛の叫びでもあります。大地が生き延びるために、人類の存在は必要ないでしょう。しかし私たちは、母なる大地なしには生きられません。

2010年12月、南米の国ボリビアは「母なる大地法」を制定しました。私たちもこのボリビアの例に倣うべきではないでしょうか。この法律は、社会が守るべき義務を次のように定めていますⁱⁱ。

「母なる大地は、次の諸権利——すなわち、生命、生命の多様性、水、清浄な空気、安定、修復、汚染のない状態を享受する権利——を有する」

神は私たちのためにどのような夢を抱いておられるのか、神が抱く夢に私はどうすれば協力できるのか、私は信仰者としてしばしば自問しています。

信仰の眼をとおして、私はすべての人々の内に神を見、すべての被造物を神の一部として体験するよう努めています。

私たちはみな、歴史が負った傷を癒し、変革的正義に向けた活動をとおし、平和を生み出す助産師になることを神から託されているのだ信じます。

受賞の報せを受けたときにも申し上げましたが、私の父は第二次世界大戦中、対日戦線の兵士として従軍しました。戦争に行く前の父と、戦争から帰った父は別人のようだったと、母がある日話しておりました。

今日、父は天国から私に、そして皆さんに笑顔を見せてくれているものと信じます。

「生ましめんかな
生ましめんかな
己が命捨つとも」

ありがとうございました。

i この詩は、『中国文化』創刊号（原爆特集号、1946年3月）に初めて掲載された。この詩の中の地下室は、千田町の旧郵便局の地下室である。

出典：黒い卵 栗原貞子の詩、リチャード・H・ミネア著（序文・注釈付き）翻訳

出版社：ミシガン大学日本研究センター、ミシガン州アナーバー、1994年

ii Google